

## 『太平記』卷五の構成と展開

谷 垣 伊 太 雄

そして、卷五は、卷四とは対照的に、北条方の動静を中心として語られる。<sup>(注1)</sup>その章立てを流布本<sup>(注2)</sup>によって記すと次の通りである。

- 一、持明院殿御即位事
- 二、宣房卿二君奉公事
- 三、中堂新常燈消事
- 四、相摸入道弄田楽并鬪犬事
- 五、時政参籠榎嶋事
- 六、大塔宮熊野落事

以下、作品の展開を追ってみよう。第一章は、光厳天皇の即位を語るだけでなく、右に引用した卷四卷末の第七章の末文と対応する持明院方の「門前市ヲ成シ、堂上花ノ如シ」という状況を叙す。

第二章は、「前朝舊弊ノ寵臣」であり、子息二人（藤房・季房）が遠流となった万里小路宣房のもとに、「罪科深キ人ニテ有ベカリシヲ、賢才ノ聞ヘ有トテ、關東以ニ別儀ニ其罪ヲ宥メ、當今ニ可レ被<sub>レ</sub>召

『太平記』卷四は、笠置攻防戦での敗軍たる後醍醐天皇方の、皇子達を含む人物について、その処刑・流罪を描く。更に「先帝」としての後醍醐天皇の隠岐配流を巻末に配置し、隠岐島での日々を哀感をこめて描き、「天地開闢ヨリ以来斯ル不思議ヲ不聞。サレバ掛<sub>レ</sub>天日月モ、為<sub>レ</sub>誰明ナル事不<sub>レ</sub>恥。無心草木モ悲<sub>レ</sub>之花開事ヲ忘ツベシ」と締め括る。ただ、後醍醐帝は、俊明極の予言に従って、法体になる事を拒絶し、又、隠岐への配流の途次、児島高德が桜木に書き付けた一句の詩を見て「龍顔殊ニ御快ク笑セ」とあるように、「二度帝位ヲ踐」む事を確信するものとして形象されている。それは、巻二で、むしろ虚像化する形で京都を脱出した後醍醐帝とは明らかに異なる、むしろ対極をなす人物像と見る事ができる。

仕之由」との勅使日野資明が光厳天皇より派遣された事を記す。

これに対して宣房は、④後醍醐天皇の「不義ノ行」による配流について、予め知らなかったため「諫言」できなかったけれども、世人はその責任を許容しないであろうこと、②息子二人が遠流となり、自分も七十歳という老齢であること、この二つの理由をあげて、「二君ノ朝」に出仕するより「伯夷ガ行」を見習いたいと、「涙ヲ流テ」ことわる。勅使資明は「感涙ヲ押へ兼テ」口をときした後、おもむろに中国故事を引用、「理ヲ盡シテ」説得したため、宣房も遂に光厳朝への出仕を応諾する事となる。

主君に対する忠諫は、巻四・呉越合戦譚に於て中心的なテーマとなっていたものであるが、現実には宣房の「諫言」があれば後醍醐帝の隠岐配流という結果がありえなかったとは考え難い。むしろ、この場面では、招請を一度は辞退した宣房が、勅使の「感涙」と「理」とによって、ようやく出仕を承引したという構成をとる事によって、宣房の行動は正当化・称揚され、更に、そのような宣房を擁してき後醍醐帝側〓反北条側への肯定的評価をも齎らす事となっている。<sup>(注1)</sup>

第三章と第四章とは、冒頭部分に於て対比が見られる。

第三章	其比	都鄙ノ間ニ	希代ノ不思議共多カリケリ
第四章	又其比	洛中ニ	田樂ヲ弄事昌ニシテ、貴賤擧テ是ニ着セリ

第三章では、「希代ノ不思議」の一例として、叡山の根本中堂の

新常灯(それは後醍醐帝が点灯したもので、「未來永劫ニ至迄消ル事ナカルベキ」ものであった)を山鳩が消すという「不思議」な事がおこったが、その山鳩を馳が食い殺すという「不思議」な結末になった事が語られる。これは、後醍醐帝の運命について、負(マイナス)が負のままでは終わらない事を暗示する象徴的な出来事として記されている。

一方、第四章では、田樂流行の具体例として、北条高時の熱中ぶりが描かれる。「天王寺ノヤウウレイボシヲ見バヤ」と囃す「新座・本座ノ田樂共十餘人」を「或官女」が覗き見したところ、彼らが「異類異形ノ媚者共」であったため、「不思議」に思った官女から城入道(安達時頼)に報告され、城入道の目で「禽獸ノ足迹」が確認される。ところが高時自身は「惘然トシテ更ニ所レ知ナシ」という有様であった。

この件については、丹波仲範の「天王寺邊ヨリ天下ノ動亂出來テ、國家敗亡シヌト覺ユ」との予見(これは、巻六で語られる天王寺での正成挙兵を指す)と、その中、そして仲範の「未然ノ凶ヲ鑿ケル博覽ノ程」へと、叙述がやや先行する事となるが、高時に関する記述は、田樂に付加する形で「増々奇物ヲ愛スル事止時ナシ」(傍点筆者。以下同じ)と、増幅して描かれ、高時が闘犬に熱中したため「其幣甚多シ」と記される。そして、「心ナキ人」は「アラ面白ヤ」とする一方で、「智アル人」が「アナ忌々シヤ」と悲嘆した事を叙し、「見聞ノ准フル處、耳目雖レ異、其前相皆鬪靜死亡ノ中ニ在テ、淺猿シカリシ擧動ナリ」と、作者自身が「智アル人」以上に、

高時を批判的に見る形で締め括る。

つまり、第三章と第四章とは、後醍醐帝とを北条高時とを対比してその運命について、いづれも暗示的に描きつつも、結局は北条氏の滅亡と後醍醐帝の再起（還幸）とを予見する点では、同じ事（事の表裏）を語っていると言えよう。

そして、この第四章の予言は、第五章に於て、もう一度確認される事となる。

第五章は、「時已ニ澆季ニ及デ、武家天下ノ權ヲ執ル」とはいうものの「或ハ一代ニシテ滅ビ、或ハ二世ヲモ不レ待シテ失ヌ」という状況のもとに於て、北条氏が「天下ヲ保ツ事已ニ九代ニ及ブ」理由について、初代時政にまで溯行し、江の島弁財天の靈驗譚として語られる。

時政が江の島に参籠し、子孫の繁昌を祈願したところ、二十一日目の夜「赤キ袴ニ柳裏ノ衣着タル女房ノ、端嚴美麗ナル」が現れて、時政に「汝が前生ハ箱根法師也。六十六部ノ法華經ヲ書寫シテ、十六箇國ノ靈地ニ奉納シタリシ善根ニ依テ、再ビ此土ニ生ル事ヲ得タリ。去バ子孫永ク日本ノ主ト成テ、榮花ニ可レ誇。但其舉動違所アラバ、七代ヲ不レ可レ過」と告げ、大蛇に変身し「大ナル鱗ヲ三ツ」落して海中に入つて行った（その三つ鱗は北条家の家紋となった）。

つまり、「今相摸入道七代ニ過テ天下ヲ保ケルモ、江嶋ノ辨才天ノ御利生、又ハ過去ノ善因ニ感ジテゲル故」なのであって、いわば効力を失った高時は「可レ亡時刻到來シテ、斯ル不思議ノ振舞ヲモセラレケル歟」というわけである。

第五章における「已ニ九代ニ及ブ」との表現自体が、北条氏の存続の限界を暗示しており、それが「已ニ七代ヲ過、九代ニ及ベリ」と再述される事によって、北条氏の滅亡は確定的なものとなる。そして、その滅亡については、時代の趨勢とか鎌倉幕府の内包する矛盾そのものよりも、時政の善根によって「七代」という保証を得た北条氏の中にあつて、本人の自覚がないまま異常なまでに田楽・闘犬に熱中する高時の「不思議ノ振舞」に、その因を求める形で記述される。そこには、「時已ニ澆季」という時代認識に基づいての、『太平記』作者なりの、一つの歴史の解釈のあり様を窺う事ができる。

## 二

「大塔宮二品親王ハ、笠置ノ城ノ安否ヲ被<sub>レ</sub>聞食<sub>一</sub>為ニ、暫ク南都ノ船若寺ニ忍テ御座有ケルガ、笠置ノ城已ニ落テ、主上被<sub>レ</sub>囚サセ給ヌト聞ヘシカバ、虎ノ尾ヲ履恐レ御身ノ上ニ迫テ、天地雖<sub>レ</sub>廣御身ヲ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>藏所ナシ」との一文で始まる第六章は、巻五の中では、やや異質の章である。というのも、右の傍線部分①は巻二の巻末の第十章に、②は巻三第三章に、それぞれ連接する内容をもつ、というようにな事にも起因している。

しかし、巻三で楠正成の事が語られ、巻四で後醍醐帝の配流が語られた後にあつて、正成とともに「配流」の枠外にいた大塔宮の事は、後醍醐帝側の重要人物として、当然言及されるべき存在ではあ

った（正成も巻六に再登場する）。

さて、この第六章のうち、分量としては約一割にあたる冒頭部分が般若寺での危機脱出譚、残りが「熊野落ち」という事になる。まず、般若寺での事については、一乗院の候人按察法眼好専が五百余騎を率いて攻め寄せた際に「折節宮ニ奉<sub>レ</sub>付タル人獨モ無リケレバ」という困難な状況下の事件として語られる。一旦は自害さえも考えた大塔宮が「若ヤ」と思い返して、大般若経の唐櫃三つのうち、一度目は蓋の開いていた櫃に隠れ、他の二つの櫃を探して立ち去った追手が引き返してくる前に、今度は別の櫃に入り替って危機を逃れる。「是偏ニ摩利支天ノ冥應、又ハ十六善神ノ擁護ニ依ル命也ト、信心肝ニ銘シ感涙御袖ヲ濕セリ」とあるが、「朝暮只武勇ノ御嗜ノ外ハ他事ナシ」（巻第二章）という「不思議ノ門主（天台座主）」生活を送った大塔宮を思えば、般若寺での的確な判断と敏捷な行動も、一人で鍛練を重ねていた「武藝ノ道」（同右）の基本を実践したに過ぎぬと考える事もできよう。

奈良周辺も危険ということになり、やがて大塔宮は光林房玄尊ら九人の供の者<sup>(注6)</sup>を連れて熊野に向かう。ここでも、「御歩行ノ長途ハ定テ叶ハセ給ハジト、御伴ノ人々兼テハ心苦シク思ケルニ、案ニ相違シテ、イツ習ハセ給ヒタル御事ナラネドモ怪シゲナル單皮・脚巾・草鞋ヲ召テ、少シモ草臥タル御氣色モナク、社々ノ奉幣、宿々ノ御勤懈ラセ給ハザリケレバ、路次ニ行逢ヒケル道者モ、勤修ヲ積メル先達モ見尤ル事モ無リケリ」とあるが、前述したように、大塔宮の叡山での修行ぶりからすれば、その成果の発揮される場面が到来

したわけであり、傍線部分①の従者達の懸念は、「元ヨリ龍樓鳳閣ノ内ニ長トナラセ給テ、華軒香車ノ外ヲ出サセ給ハ又御事ナレバ」という固定的な論理（これは、現実の従者達のものというより作者自身の論理であろう）に託しての文飾にすぎないと考えられ、叙述の中では傍線部分②のように、従者達の予想に反する強靱な大塔宮の実像が確認される事となる。

切目王子に到着した夜、大塔宮は熊野三所権現等に対して「逆臣忽ニ亡ビテ朝廷再耀ク事ヲ令レ得給ヘ」と祈請する。「五體ヲ地ニ投テ一心ニ誠ヲ致テ」徹夜で祈る様子は「丹誠無二ノ御勤、感應ナドカアラザラント、神慮モ暗ニ被計タリ」というものであった。そして、うとうととした大塔宮の夢に「鬢結タル童子」が現れて、「熊野三山ノ間ハ尙モ人ノ心不和ニシテ大儀成難シ。是ヨリ十津川ノ方ヘ御渡候テ時ノ至ンヨ御待候ヘカシ」と告げる。夢が覚めて「是權現ノ御告也ケリト憑敷」思った大塔宮は「御悦ノ奉幣ヲ捧ゲ」十津河へと向かう。

以下、巻五の巻末に至る大塔宮の足跡を、章段に分けて辿ってみよう。

- ① 戸野兵衛・竹原八郎入道邸での逗留。
- ② 熊野別当定遍よりの大塔宮追討の布告と竹原入道の子息の変心。大塔宮一行、高野に向かう。
- ③ 芋瀬庄司の対応と、赤松則祐・平賀三郎・村上義光の武勇譚。
- ④ 大塔宮一行、小原へ向かう。玉置庄司、敵対する。
- ⑤ 野長瀬兄弟の援軍と老松明神靈験譚。

① 大塔宮、槇野城へ。やがて、吉野河畔に立て籠る。

②で大塔宮一行が訪ねたのは、竹原八郎入道の甥にあたる戸野兵衛であった。大塔宮に随行していた光林房玄尊が「如何ニモシテ是ヲ憑マバヤ」と考えていたところ、家から「哀レ貴カラン山伏ノ出来レカシ、祈ラセ進ラセン」という声が聞こえたので、玄尊は大塔宮を「効驗第一」の「先達」に仕立てて家に入る。大塔宮の加持によって病人が平癒したため、一行は、戸野宅で饗応を受け十数日を過ごす。そして、戸野兵衛の本心が大塔宮に味方し守護しようとするものである事が判明し、宮達も山伏装束を脱ぐ。戸野は黒木御所を設け、宮を守護したが、「是モ猶大儀ノ計略難ノ叶」として、叔父の竹原入道に事情を告げ、今度は竹原入道が自邸に大塔宮を迎える。その忠義ぶりに宮も安心し「此ニ半年許」滞在する。更に「一人ニ被見知ニシト被思食ニケル御支度ニ」遷俗姿となり「竹原八郎入道ガ息女ヲ、夜ルノヨトドへ被召テ御覺異レ他ナリ」という事で「サテコソ家主ノ入道モ弥志ヲ傾ケ、近邊ノ郷民共モ次第ニ歸伏申タル由ニテ、却テ武家ヲバ徧シケリ」という展開を見せる。

ところで、光林房玄尊は、「サモアル人ノ家」の主が戸野兵衛であると知った時、「サテハ是コソ、弓矢取テサル者ト聞及ブ者ナレ、如何ニモシテ是ヲ憑マバヤ」と思ったのであった。かつて、巻三第一章で後醍醐帝の夢を契機として登場した楠正成についての「弓矢取テ名ヲ得タル者」と近似する紹介をされた戸野兵衛から、竹原八郎入道へと役割交替が行われる辺の問題点については、別稿に譲り

たいと思うが、この部分には、物語的には充分消化されぬさまざまの要素を包含しているようである。

③、熊野の別当定遍は、「郷民共ノ欲心」に訴え、恩賞を立礼に告げて、大塔宮の追討を画策する。その結果、「欲心強盛ノ八庄司」達は愛心し、竹原入道の子息さえ宮を討とうとしたため、大塔宮も遂に十津川を出て高野の方へ向かう。

④では、その道が「小原・芋瀬・中津河ト云敵陣ノ難所ヲ經テ通路ナレバ、中々敵ヲ打憑テ見バヤ」という事となり、芋瀬庄司の所へ行く。すると芋瀬庄司は、①「御伴ノ人々ノ中ニ名字サリヌベカランズル人ヲ一兩人賜テ、武家へ召渡」すか、②「御紋ノ旗ヲ給テ、合戦仕テ候ツル支證是ニテ候ト、武家へ」申し出るか、どちらかが受け入れられなければ合戦もやむをえない、との応対を示す。大塔宮が「此事何レモ難儀也ト思召テ、敢テ御返事モ無」かったのに対し、赤松則祐は①の条件を受け入れ自分が犠牲になると主張。それに対して平賀三郎は「芋瀬庄司ガ申所、ゲニモ難レ被黙止一候へバ」と述べた上で、「サマデノ恥ナラズ」と②を受け入れる事を主張したため、大塔宮も納得し、「月日ヲ金銀ニテ打チ着タル錦ノ御旗」が芋瀬庄司に渡された。ところが、一行から遅れてやって来た村上義光がこの旗を見かけ、事情は聞かずに旗を奪い返し、宮達に追い付く。村上から説明を聞いた大塔宮は、赤松の忠・平賀の智・村上の勇を中国の勇者達に比肩しうるものとして「此三傑ヲ以テ、我蓋レ治三天下ニ哉」と述べた——というのである。

ただ、考えてみれば、村上義光の武勇談によって、大塔宮を取り巻

く状況が好転するわけではない。むしろ、赤松の主張を聞いた上での平賀の意見こそが、現実を見詰めた案として、大塔宮自身も一度は「ゲニモト思召」したのであったから、このくだりは、作品の時間を先に進めるといふより、やや迂回する形の講談風の挿話と言えよう。

④では、「薪負タル山人」に教えられて玉置庄司の所へ、通行の交渉のために使者として赴いた片岡八郎と矢田彦七のうち、片岡が玉置庄司の郎党に射殺されてしまう。矢田の報告を聞いた大塔宮は、「サテハ通レヌ道ニ行迫リヌ。運ノ窮達歎クニ無レ詞」としながらも「サレバトテ此ニ可レ留ニ非ズ、行レンズル所マデ行ヤ」と山路を越えて行く。ところが中津河峠で、玉置勢と思われる五六百騎と出くわしてしまふ。しかし、この場面での大塔宮は、「各相構テ、吾ヨリ先ニ腹切事不レ可レ有。吾已ニ自害セバ、面ノ皮ヲ劔耳鼻ヲ切テ、誰ガ首トモ見ヘヌ様ニシ成テ捨ベシ」「死シテ後マデモ、威ヲ天下ニ残スヲ以テ良將トセリ。今ハトテモ通レヌ所ゾ、相構テ人々キタナビレテ、敵ニ笑ハルナ」と、凄絶とも言える発言を家来達に向かつて投げつける。ただ、教の上では三十二人対五百余騎と、「可レ戦様ハ無」かった。

⑤、ところが、そこに紀伊国の野長瀬兄弟の軍勢三千余騎が現れ、玉置勢を追い散らしてしまう。この援軍については、前日に「老松」といふ名の「年十四五許ニ候シ童」が、野長瀬兄弟のもとを訪れ「大塔宮明日中津河ヲ御出有テ、小原へ御通りアランズルガ、一定道ニテ難ニ逢ハヌト覺ルゾ、志ヲ存ゼン人ハ急ギ御迎ニ參レ」と触れ回

つたために救援に來た、と兄弟の口から説明される。「直事に非ズ」と思った大塔宮が「年來御身ヲ放サレザリシ膚ノ御守」を確かめてみたところ、「北野天神ノ御神體ヲ金銅ニテ被ニ鑄進ニタル其御眷屬、老松ノ明神ノ御神體」が、全身に汗をかき、足には土が付いていた。

①、大塔宮は、この不思議な出来事を「サテハ佳運神慮ニ叶ヘリ、逆徒ノ退治何ノ疑カ可レ有」として、榎野城に入り、ここが「分内狭クテ可レ惡」との判断から、「吉野ノ大衆」を味方に語らい、吉野河を前に控えて、城郭を構え、三千余騎で立て籠る。

### 三

以上見てきたように、巻五の三分の一に相当する第一章から第五章までは、巻四との対照において、持明院・北条氏側に關する叙述が中心となっている。ただ、巻四の後醍醐帝の隱岐配流と対比をなす持明院殿（光嚴院）の即位、そして光嚴帝を補佐する存在としての万里小路宣房の「二君奉公」を描きつつも、これも前述のごとく、その出仕が光嚴帝ではなく、むしろ間接的に後醍醐帝側を同情的に評価する要素を含んでいる。

第三章で山門根本中堂の新常灯が消えるという、点灯者である後醍醐帝にとって不吉な出来事の場合にも、叙述がそこで終わらずに、灯を消した山鳩を馳が食い殺すという第二段階が語られる事によって、後醍醐帝の巻き返し（隱岐脱出・北条氏討滅）を暗示する叙述姿勢となっている。

そして、第四・第五章では、時政の積善による北条氏繁榮の有効期限が過ぎた高時は、田楽・闘犬に熱中する逸遊ぶりによって、滅亡への道を加速させて転落して行く。

根本中堂の新常灯が鳩のために消されたのは元徳三年(一三三二)四月一日のことであり、高時が田楽・闘犬に熱中していたとの記録が見られるのも同年の事である。それを、元弘二年(正慶元年・一三三二)三月二十二日の日付で始まる巻五の文脈の中に、「其比」という表現を使って填め込む事によって、北条氏の末期的症状を高時個人に集中させる形で鮮明にしたのが『太平記』作者の構想のなだと考えることができる。

一見、異質に見える第六章は、第一章く第五章との、巻四とは違った対照的叙述と考えれば、巻五の三分の二という分量の多さも、兄弟や父帝の流論生活に匹敵する苦難体験に必要なものと言う事ができよう。

後醍醐帝が捕えられた元弘元年(一三三二)九月末頃以後の大塔宮の静について、『増鏡』第十五「むら時雨」は、笠置落城を描写する中で、「中務の御子、大塔の宮などはかねてよりこゝを出でさせ給て、楠の木が館におはしませしけり」とし、翌年の記事を載せる第十六「久米のさら山」においても、「大塔の尊雲法親王ばかりは、虎の口を逃れたる御さまにて、こゝかしこさすらへおはしますも、やすき空なく、いかで過ぐし果つべき御身なりけん」と心苦しう見えたり」と記し、更に「まことや、この卯月の比より、年の名變はりにしぞかし。正慶とぞいふなる。大塔の法親王・楠の木の正成など

は、なをおなじ心にて、世を傾けんはかりことをのみめぐらすべし。正成は、金剛山千早と云所に、いかめしき城をこしらへて、えもいはず猛き物ども多く籠りにたり。さて大塔の宮の今旨とて、國々のつわ物を語らいとれば、世に怨みある物など、こゝかしこに隠るへばみてをる限りは、集まりつどひけり。宮は熊野にもおはししけるが、大峯を傳ひて、吉野にも高野にもおのしまし通ひつゝ、さりぬべきまくにはよく紛れものし給て、たけき御有様のみあらはし給へば、いかしこき大將軍にいますべしとて、つき従いきこゆる物、いと多くなり行けば」と記している。『梅松論』も、「先帝ノ宮、山ノ座主大塔宮御還俗アテ、兵部卿ノ親王護良ト申。去年君笠置ヘイラセ給シ時ハ、大和國ニ半面々ノ御造蔡ノ企有ベキヨシキ、シカドモ、御在所分明ナラザリシカバ、多武峯吉野法師ヲ相語給テ、御會稽ヲ清メラルベキ旨様々聞エテ、畿内不靜處ニ」と記す。つまり、大軍も居城も持たぬ大塔宮としては、「大儀」のために、丁度、巻一第五章における、俊基が籠居と偽って山伏姿となり大和・河内を偵察して回った事を相似する形で、大きく言えば「熊野」と称される大和から紀伊・伊勢をも包括する空間、焦点を絞った場合の「十津河」を、その行動を具体化すべく「小原・芋瀬・中津河」等の地名を点綴させながら、「時ノ至ンヲ」待つての遍歴をする役割を果たした、と言えよう。

従つて、大塔宮の足跡について詳しく検証された安井久善氏が「この内容自体架空の可能性があり、少なくとも筆者の創作が加味されたもの」とされ、岡見正雄氏も「当時の熊野信仰を背景として、般

若寺から紀伊路に困苦を経て行かれたとするのが、『太平記』の物語的姿勢、いわば講談であつたらう」と述べておられるように、現実の地理と『太平記』の記述との乖離<sup>乖離</sup>は、文学としての『太平記』にとって、決してマイナスのものではない。

## 注

- 1、山下宏明氏も『新潮日本古典集成太平記一』に於て、「前巻に描いた先帝側に属する人々の落魄とは対照的に、先厳天皇の即位以下、持明院系の人々の栄華をもって巻を始める」と解説しておられる。
- 2、日本古典文学大系本（岩波書店）。以下の本文引用も用じ。
- 3、この事については『太平記』巻四における呉越合戦説話の表現と方法（『大阪樟蔭女子大学論集』第25号）でも触れた。
- 4、宣房は登場回数が必ずしも多いわけではないが、巻四第一章では哀感を込めて同情的に描かれており、巻十三第二章でも春日社の霊夢を授かる人物として描かれている。
- 5、例えば、義輝本は第五章を「累祖代々己ヲ責テ礼儀ニ不レ滞学レ古仁政ニ私ナシサレハ子孫無窮ニ光栄ストイエトモ高時今ノ行跡悉ク旧規ニ不レ協人望天慮ノ憚ヲモ不レ恐サレハ可レ亡ル」時刻相感シテ加様之哀トモ有ルヤラント人皆唇ヲソカエシケル」と結ぶ。
- 6、岡見正雄氏は「太平記（一）」（角川文庫）の補注の中で「武蔵坊、片岡八郎等は恐らく義経の家来の名を取ったので、この熊野落の途中芋瀬の庄司の遮るのを村上義光が錦の旗を奪い通過する条は武蔵坊弁慶が安宅の関を通過する説話を取入れているのではなからうか」との説を展開しておられる。
- 7、日本古典文学大系本（岩波書店）による。
- 8、『京大本梅松論』（京都大学国文学会）による。
- 9、第六章の168頁・178頁で使用されている。
- 10、『太平記合戦譚の研究』（桜楓社）。
- 11、『鑑賞日本古典文学』太平記・曾我物語・義経記（角川書店）。
- 12、巻四に見られる一宮の配流地「土佐ノ畑」の場合に関して考察した事がある（拙稿『太平記』巻四をめぐる諸本の構想と構成）（『樟蔭国文学』第22号）。